

二年学年だより

No. 3

6月号

令和6年5月31日発行

202HR

百聞は一見に如かず

先日、2年生の修学旅行が実施された。関東、北海道、そして海外の3つの班に分かれ、それぞれのコースで普段の学校生活では得られない特別な経験をしたのではないだろうか。かく言う私も、初めての海外ということもあり心配や不安もあったが、3日間の海外滞在で実に多くのことを経験することができた。

まずは、出入国の手続き。慣れている人にとってはなんでもない作業なのだろうが、多くの生徒もそうであったように私も右往左往する事態に。国を行き来することは、思った以上に大変なことなのだ痛感した。シンガポールの道中、バスから見えたものは、自然に生えているジャングルとこちらでは当たり前の日本車、そしてトラックの荷台に乗っている多くの労働者とおぼしき人。様々なことを思いながら、一行はマレーシア、ジョホールバルの大学、そしてプライ村へ向かった。現地の大学生と異文化交流を楽しそうにしている生徒を見て、ここまで来た甲斐があったと感じた。プライ村という小さな村で生徒は、マレーの伝統的な衣装に身を包み、イスラムの風習に倣い、右手でマレー料理を食した。トイレに紙がない光景もなかなか新鮮であったのではないだろうか。突然のスコールにも見舞われ、桁違いの雨音と雷鳴の中で行われた村の結婚式体験は、現地の気候や風土、文化を知るのには十分であった。ジョホールバルというと、サッカー日本代表が初めてW杯出場を決めた地として知られているが、実際に赴いてみることでしか経験できないことが多いのだと認識した。マレーシアに入国しようと待機するバイクの長蛇の列が見られたが、現地のガイドさんによると、シンガポールのほうが給料が良く、出稼ぎのために来ていた人々がマレーシアの家に帰る光景だということであった。元々マレーシアとシンガポールは一つの国であったという事実も知り、驚くとともに、これほどまでに違う発展を遂げた両国の歴史について興味・関心が湧いてきた。そのような中で訪れたシンガポール国立博物館では、時間を忘れて展示物の英語を必死に解読し、シンガポール発展の軌跡に触れた。旅の最後に見たマリーナ・ベイ・サンズからの夜景は、言葉では言い表せないような幻想的なものであったと感じる生徒は多くいたようだが……少々の高所恐怖症がある私にとっては、写真の撮影もままならない状態であった。恐怖におびえながら見た夜景は、一生忘れないであろう。

あつという間の海外滞在であったが、実際に自分の目で見る、自分の肌で感じる、自分の耳で聞くことで大きな学びを生徒は得たのではないだろうか。シンガポールは暑い……といわれても実際に行ってみないとその暑さは誰にも分かりはしない。現地のガイドさんが言っていた「百聞は一見に如かず」という言葉が大変印象に残った修学旅行であった。(202HR担任)

「七転八起」

初めましての生徒も多いかと思いますが、202HR 副担任の武田章宏です。修学旅行で多くのことを知り、経験したと思います。その中での学び、出来事や体験などは今後の人生で大小はあれど、必ず役立つ場面が来ます。その経験を思い出だけにするのではなく、自分だけの学びにしてください。一方で、もうすぐ一学期末考査が始まります。勉強を苦手とする生徒も多いと思いますが、楽しいことがあれば辛いこともあります。人生には浮き沈みがあり、今後も辛いことに直面することがあるかもしれません。私は高校生の時、辛いことから目を背け、後回しにしてしまうことがありました。しかし、多くの辛いことを乗り越え、今では夢である教員として働くことができています。何回失敗しても前を向き、諦めないでください。そして、夢の実現のためや興味のあることにはどんどん挑戦してほしいと思っています。挑戦を諦めない限り、夢を実現することができ、失敗しても努力したという経験は残り、挑戦した経験はかけがえのないものになると思います。実際に、私も叶えることができなかった目標はいくつもあります。挑戦したことに後悔はなく、それが私の礎にもなっているので、皆さんも様々なことに挑戦し、夢の実現のために努力してみてください。(202HR 副担任)